

第2章 高鳳蓮初期の剪紙-3

文と写真 周 路

翻訳：有為楠君代

筆者がかつて《陝北四女性の剪紙》を上梓した時、高鳳蓮の剪紙の外形上の特色を次のように描写したことがあります。「高鳳蓮の剪紙は、評判通りに風格があり、独特で一派を成して、伝統的な題材は同じですがその手法は普通の剪紙と全く異なっています。彼女の剪紙はすべて四角形で、密なところと粗なところが散らばってバランスが取れ、お互いに引き立て合っているところが、他の人達の作品とは違って新鮮です。鉛筆で下絵を描かず細部も鋏を使い、風の流れ、鶴の羽、獅子のたてがみまで全て思いのままに鋏で剪るところは、まるで魔法の鋏がひとりで動いているように見えて、思わず見とれてしまいます。そして、高鳳蓮が剪り出す動物・家畜、更には人物もまるで人類の祖先である猿のような表情で、悟空が西王母の桃を食べているような幸せそうな表情をしています。」

作品の多くは下図のように折り返されて対称に剪られることが多く華やかで、石に彫られた壁画や、神話に出て来る神や怪獣のようにどっしりとして、不思議な雰囲気を持っています。」

“飛天”のイメージはご存知のように、敦煌壁画の経典の中から出ています。仏教の中では、極楽浄土で暮らす神聖な人物を“天”と呼び、飛天は多く墳墓室の壁画に描かれ、墓室の主人の魂が仙人となって天に昇るように、との祈りのシンボルとなっています。初めは壁画に描かれる、飛んでいる神の像を飛天と称していましたが、後に、敦煌壁画芸術の技法を表す専門用語となりました(右上図下)。

しかし、黄土高原の奥深くに住み、壁画を見たこ



剪紙を楽しむ。毎日の生活の中でかけがえのない一時



敦煌莫高窟の壁画“飛天” (百度百科から)

とも無い農村の老人が、どうしてこのような知識を得ることが出来るのでしょうか？ 或いは、虎の話と同じように、古老からの伝説として、聞いて、心で創造するのでしょうか？

高鳳蓮の剪り出す“飛天”は、敦煌壁画の“飛天”と、姿は違いますが同じような雰囲気を感じさせ、著者に、安塞地区の剪紙“農耕図”が、二千年以上前の漢代に鑄造された青銅器上に描かれた“農耕図”と酷似しているという事実を思い起こさせま



鳳凰



勇者



桃を食べる猿



飛天 3種



愛の告白

す。同じ黄土高原で、同じ現代に、飛天にしろ農耕図にしろ、元の絵を見たことも知ることもなかった人達が、何千年も前に描かれた絵と同じような雰囲気剪紙を剪るのは不思議です。謎のタイムトンネルでもあるのでしょうか？

ところで高鳳蓮の剪紙の作品の中には、この他に“牽牛織女”の神話のような愛情伝説をイメージさせる剪紙もあるので（上図右端「愛の告白」）。

「抓髻娃娃」は、陝北地域で民間に流布している万能の精霊であり、人々の信仰と希望を叶える厄除けの神です。中国語で「抓髻」は髪を束ねる、「娃娃」は子供という意味ですから、日本語に訳せば「髪を結んだ子ども」と言ったような意味ですが、あまりピンときませんね。此处は、^{zhuā jì wá wa}抓髻娃娃（ジュアジーワーワー）をそのまま、お話を勧めましょう。「抓髻」の「抓」は束ねる、つかむ、「髻」は髻（まげ）と言う意味で、「吉」と同じ音なので、「抓髻」は「吉を掴む」即ち「幸せを掴む」と言う意味になり、吉祥とされています。

延川地域では、古くからこの「抓髻娃娃」が土地の守護神とみなされ、人々は厄除け招福、更には子孫繁栄にまで、そのご利益を信じています。また、魚・蓮・石榴・鳥なども、多子・多福のシンボルと見做します。新婚の部屋には、このような図案がオンドル・壁・家具などの周り、至る所に見られます。男女が愛し合い、愛情が末永く続くことを表す絵、男性が耕し、女性が機を織る絵、植付け・収穫など農家の楽しみを表した絵などが、幸福のサンプルのように翻ります。見慣れないと驚きますが、よく見る

と、人々の生命力へのこだわりやよりよい生活への希望が見て取れます。

研究者によると、このような様式は、商（殷）の時代からの文化ですが、他の地域ではとうの昔に失われてしまいました。頭の上の二つの髻を庭の鶏に変えた図は、故宮博物院に収蔵される「青女玉佩」とそっくりで、昔からの生殖崇拝のなごりです。

高鳳蓮の剪紙「抓髻娃娃」は、陝北民間剪紙の中でも代表的な作品で、「娃娃」が様々なお目出度いもの——鶏・兔・石榴・牡丹など——を手にして、子供や孫の誕生を待ち望む気持ちがいじみ出て来ます。「娃娃」には、性別があり、女の子は頭に花の冠や花飾りをつけており、男の子はまるい頭に辮髪を垂らしていますが、違いははっきりせず、どちらも楽し気に紙面から飛び出してくるような勢いがあります。

ここに、“蓮の上で鶏を掴む娃娃”と言う一連の剪紙があります。鶏は中国語で ji（ジー）と発音し、髻と同じ音なので、字を髻から鶏に変えただけで、この意味になります。陝北の結婚式で初夜の前に歌われる「棗の歌」の内容を示し、「蓮の花を足で踏みつけ、鶏を掴めば、春が過ぎてきつと喜びがやって



抓髻娃娃 1



抓髻娃娃 2



扣碗 -1

来る」と言う歌詞に添った剪紙で、結婚式の後の一刻も早い懐妊を望むものです。

高鳳蓮は言います。「何かを思いついたら剪り、何かが目浮かべば剪ります。紙に向かうと心が自由になって、何でも剪りたいものを剪ります」。そんな彼女の剪紙のシリーズに「扣碗」と言うのがあります。中華料理で「扣碗」と言う蓋付容器で蒸し物を供するものがありますが、剪紙の「扣碗」は、蓋と身がきっちりと揃

っているものではなく、紙面上の碗状のものの中からは、様々なものが飛び出てきます。獲れたてのぴちぴちとはね回る魚であったり、飛んで行ってしまいそうなスズメであったりします。虎が四肢をばたつかせている図もあり、彼女によれば「これは“飛び虎”です。天上界からやって来ました」とのことです。

陝北では生活用品である「扣碗」がシンボリックな意味を持ち、その剪紙作品は、花嫁が婚礼行列の折に持参する蒸しパン（饅頭＝マントウ）の上に貼りつけられたりします。

また、「扣碗」には、生殖崇拝の巫術文化と関係する別の意味があります。扣碗の上の部分は天を、下の部分は地を表し、扣碗は、天地が合わさって宇宙となり、天地融合、陰陽和合、万物繁栄を表すシ

ンボルでもあるので「扣碗」の剪紙は多く新婚夫婦の部屋に飾られます（図 扣碗-1・2）。

黄土高原に住む人びとは、生活には苦勞が多いけれど、豪気で楽観的な気性と純朴で勤勉な性質を持っています。彼らは剪紙に、運命に対する抵抗を託し、生活に対する素朴な祈りと諦めの感情をにじませるのです。歳月を重ねるうちに、高鳳蓮は、古くからこの延川地区に伝わっている民族風習に対する理解が深まりました。特に、専門家に見出されて、専門の技術指導を受けてから、高鳳蓮の剪紙技術は更に新しい高みへと昇りました。



扣碗 -2

剪紙の中で、人物の身体には、牡丹、蓮に戯れる魚、蓮を噛む魚などの装飾、馬や虎の身体には隠喩を込めた装飾が加わり、彼女の手にかかると、伝統的な文明観と現代生活の融合が、いとも容易く大胆になされて、一つのジャンルが生まれるのです。

人物を剪れば、手足が今にも躍り出しそうに生き生きとして、男女の語らい、仕事をする男女などどれをとっても、この地に暮らす人々の生活が

優しく表現されているのです。彼女は、住民の気持ちや風習を深く理解し、延川地域に古くから伝わる生存の意識や生活感情を作品に反映させているのです。これこそが、高鳳蓮の芸術の真髄です。

皆さんは、高鳳蓮の剪紙をご覧になって、どのような感じを受けますか？ 興奮したり、新鮮さ、奇妙さを強く感じたり、素晴らしさを感じたりするでしょうか。いずれにしても、何か後を引く味わいが残りませんか？ それは、彼女の作品は陝北地域に積み重ねられた豊かな伝統文化を体現しているからなのです。

1995年、安徽美術出版社から、古元氏の題字を頂いて、私が編纂した「陝北四婆姨剪紙（陝北四女性の剪紙）」は、書中に延安の姬蘭英、洛川の楊梅英、韓菊香、延川の高鳳蓮の作品が収められています。



「陕北四婆姨剪纸」表紙



寄せ書きの「陕北四婆姨剪纸」見返しページ。右下に高鳳蓮の剪紙が貼付

当時、高鳳蓮は未だ、安塞地域の女性たちほど知られてはいなかったのですが、この画集で初めて人々の注目を集めました。当時の印刷条件は、亜鉛版の単色刷りで、画像もあまり良くありませんでしたが、それでも高鳳蓮の剪紙が、明らかに抜きん出た風格を見せているのです。

この画集の原稿は、1992年に完成し、出版社に渡したのち、私は日本へ留学するので国を留守にしました。その為、この本の出版が沙汰止みになり、1994年に私が帰国してから再度出版に向けて働きかけたのですが、暫く時間が経っているのに赤字を恐れた出版社は出版をためらいました。私自身が費用の一部を負担することで出版社を説得し、ようやくのことで出版にこぎつけました。1996年旧暦正月、出版後間もない「陕北四婆姨剪纸（陕北四女性の剪紙）」を携えて、私は、四人の女性を尋ねました。交通の便の関係から、先ず洛川の楊梅英、韓菊香、次に延安の姬蘭英を訪れて、この本を贈呈すると共に、本の見開きページに夫々に、記念の署名をするよう頼みました。

陕北地方の人たち、特に高鳳蓮世代の女性は、学校へは行かず、字を知らない人がほとんどでした。洛川の楊梅英は何年か学校へ通ったそうで、署名をしてくれました。韓菊香は何日か私塾に通ったことがあると言って、繁体字で署名してくれました。姬蘭英は全く学校へ通ったことが無いので、字は知りませんでしたが、私の依頼に、娘さんが彼女の手を取って書かせてくれて、何とか名前を書いてくれま

した。

しかし、最後に訪れた延川の高鳳蓮の家では、本の出版をみんなが喜んでくれましたが、高鳳蓮に署名を頼むと、彼女は拒否しました。姬蘭英の場合を説明すると、周りの人々はそれに賛成して、娘さんが筆記用具を持って来て、一緒に書く準備をしてくれましたが、彼女はきっぱりと拒絶しました。あまりの激しさに、その場の雰囲気気まずくなりかけました。

しかし、幸いなことにその後、高鳳蓮自身の提案で、小さな紙を取り出し、指の先程の小さな鼠を剪り、それを彼女の署名として本に貼ることで解決しました。高鳳蓮は鼠年で、この鼠の剪紙が、彼女の署名の代役を務めたのです。見開きページの右下隅にしているのがその鼠です。このように、署名一つにしても、高鳳蓮は、他の人々とは対処の仕方が違います。こんなところにも、彼女独特の個性がうかがえます（上図右）。

陕北の農村では、剪紙の腕前が女性の人格を表すと考えられ、頭が良く、手先の器用な女性は家人の敬愛を受け、隣人たちから尊敬されます。そして、この地に暮らす女性達の生活に対する期待や祈りが、剪紙となって続いて来たのです。

そのおかげで、我々は中華民族の文化の多様性を知り、生き続ける地域を見つけ出して、中華文明の遺伝子をまた一つデータベースに加えることが出来るのです。これこそが、何千年も綿々と続く中華文明の真髄なのです。

（続く）